

抜歯後に鼻腔内浸潤した上顎扁平上皮癌に対して 放射線・化学療法を行った犬の1例

野田 正志, 信田 卓男, 圓尾 拓也, 伊藤 哲郎, 川村 裕子, 高平 篤志

麻布大学附属動物病院腫瘍科

[はじめに]

口腔内扁平上皮癌は麻布大学附属動物病院腫瘍科で診察した犬5819例中 106例を占め、平均9.6歳の犬において認められ、多くは歯列異常と潰瘍を伴う。遠隔転移で死亡するよりも、局所の増大によるQOLの低下を原因として最終的に死に至ることが多い。

今回ホームドクターでの抜歯後に患部が急速増大し、鼻腔内に浸潤した扁平上皮癌に対し、放射線・化学療法を実施し、良好な結果が得られたため報告する。

[症 例]

ポメラニアン、オス、8歳。歯肉腫脹を主訴に紹介獣医を受診し、抜歯および同部位の切除を実施した。病理組織検査にて扁平上皮癌、マージン不明瞭と診断された。切除部位は術後すぐに再発してきたため、今後の治療方針の相談のため大学病院を受診した。初診時、上顎歯肉に赤色で2×1 cmの腫瘤が存在していた。全身への転移所見は確認されず、口腔扁平上皮癌 T2aN0M0、ステージIIと診断し、外科療法を提示した。

[治療および経過]

術前のCT検査では鼻腔内浸潤が認められたため、根治目的の拡大手術を行なう外科療法か緩和目的の

放射線・化学療法を提示した。オーナーは放射線療法を選択し、合計32Gy/4回/21日照射した。終了時には当初認められていた鼻出血やCT検査での異常所見は消失し、骨溶解部は再骨化した。その後化学療法としてカルボプラチンを総量で1260 mg/m²使用し、ピロキシカムも併用した。放射線療法終了から2年、化学療法終了から10ヶ月经過した現在、局所再発・遠隔転移も認められず全身状態は良好である。

[考 察]

悪性腫瘍が疑われる際の抜歯は歯周組織を破壊し、癌の増殖範囲を増やしてしまうため禁忌であり、中高齢の口腔内病変に対しては慎重な対応が必要である。本症例のような鼻腔内に浸潤した扁平上皮癌に対し、外科療法を行わず、放射線・化学療法で早期の局所再発・転移を予測していたが、2年の長期にわたり再発・転移もなく良好なQOLが得られている。このことは口腔扁平上皮癌に罹患した際の有効な治療法が外科療法だけでなく放射線・化学療法も存在することを示唆している。この癌の罹患平均年齢は高齢であり、外科的治療を望まないオーナーに対して本症例は他の治療選択肢を提示できる可能性があることを教えてくれた貴重な一例となった。